

解剖の模様を子供たちが間近で見守った—鴨川シーワールドで



「幻のサメ」公開解剖

世界的に捕獲数が少なく「幻のサメ」と呼ばれるメガマウスサメの公開解剖が24日、鴨川市の水族館「鴨川シーワールド」であった。子宮内で受精卵の殻が見つかり、執刀した国内サメ研究の第一人者、仲谷一宏北海道大名誉教授(72)は「世界初の発見。今後サメの生殖に関する研究が深まる」と強調した。

昨年5月に館山市洲崎沖で体長約5・4メートル、体重1・2トンのメスが定置網にかかり、引き上げ時には死んでいたため鴨川市内で冷凍保存されていた。解剖は同館の年間パスポートを持つ小中学生49人が見守る中、同館の獣医師や沖繩、大阪の水族館関係者が協力して行われた。巨大サメを初めて見る子供たちは、仲谷さんの指示で肌や歯、エラの

鴨川シーワールド 子宮内から受精卵の殻

内側を手で触るなどしていた。

仲谷さんによると、メガマウスサメは1976年に米ハワイで初めて見つかり、生態などに謎が多い。今回見つかった受精卵の殻について仲谷さんは「陸に引き上げた際の圧力で壊れたのでは」と推測。サメの骨は水分を多く含む軟骨が大半を占めており標本化が難しいとされるが、勝俣浩館長は「プラスチック剤を注入する特殊な技法で骨格標本作りに着手する」と語った。

仲谷さんは「体内に子供がいなかったのは残念だったが、間近で見ると、手で触れた小中学生たちが海の生物への関心を高めてくれるのでは」と期待を寄せた。

【中島章隆】